

研究資料

富岡鐵齋「公私事歷録」

小高根太郎

畫人富岡鐵齋の業績、また學者としての其の名聲は此處に喋々するまでもない。其の博覽強記は夙に當代識者の推服せるところ、書を藏する數萬卷、稀書善本の類多きを以て世に知られた。其の著述として上梓流布されたるは、稱呼私辨、孫吳約説、宣興發壺譜等の二三に止るも、其の八十九年の長き生涯に互り、孜々倦むなく書留めたる手記襍録詩文章稿の類は積んで山を成すに至つた。現在其等は嫡孫益太郎氏の保管せらるる所であるが、其の極一小部分を除いては曾て世に公にせらるる運びに至らなかつた。此處に紹介するもの亦其の一部であり、題して官記と稱する一書冊である。表紙、裏表紙ともに藍紙。法量、竪二六・三糎、横一八・八糎。題箋、美濃紙斷片。本文、美濃紙罫紙四十七丁九十四頁。直接表紙の上に記されたる文、「明治七年甲戌一月世稱神武天皇即位紀元二千五百三十四年ニ當」、題箋には「官記富岡百鍊手録」とあり。なほ見返に「大鳥神社大宮司拜命辭令敍位右原品二枚爲掛幅以爲家藏」と大書す。裏表紙には別に記せる文なし。本書の内容を大別して二となす。其の前半十二頁は即ち、明治十四年十二月廿五日、京都市上京區第十七組藥屋町四百廿四番地住居小川爲美より受領せる「家屋及ヒ附屬物内庭諸木石賣渡契約書」、其の他此の件と附隨せる證書類を謄寫してある。是は即ち同年十一月、大鳥神社宮司の任を辭して歸洛するに際し、其の居を此處に求めた次第であるが、此の居は即ち可進流の茶人小川可進（從來の傳記、可進を可眞と記せるは非）の舊宅であり、爲美は即ち可進の子、藥屋町は通稱室町中立賣上ルであり、此の家居は遂に鐵

齋永住の地となつた。右の證書類は今此處に轉載せぬが、此の居に移りしは翌十五年三月五日なりしこと、此の部最終頁の記事に依つて明にし得る。次に十一丁二十二頁の空白を置き、第二の部「公私事歷録」がある。二十四丁四十七頁に互り、其の經歷するところの事蹟を記してある。鐵齋自ら筆を執つて自家の履歷を記録せるもの、鐵齋傳研究の根本資料として、其の價值計る可からざるものあるは蓋し言を俟たぬ。忽卒の筆、文意まま解し難き箇所無きにしも非ず、また往々誤記誤字の類も見受けられるが妄に之を改めず、二三省略に従ひし部分もあるが、可及的原本の體裁を追ひ、若干の註を附して江湖に紹介する事とした。なほ本官記中には、大正十一年、帝國美術院に提出せる履歷書の寫

(紙 表)

が挿入されてゐる。竪二七・七糎、横四〇糎の罫紙。「寫官帑體裁」と題す。公私事歷錄に記す所を概括して一目瞭然、其の略歴を知る上に極めて便宜なるを以て、併せて此處に掲載する事とした。かかる貴重なる資料を此處に發表するを得しは、一に富岡益太郎氏の御厚情に依る。記して感謝の意を表する事とする。

(頁一第錄歷事私公)

〔註〕 公私事歷錄

○

上京廿二區新三本南町〔註二〕

元鍊齋事〔註三〕
富岡百鍊

右者御用之義有之候處當時他行致居候
ニ付歸京ニ候者早々可届出者也

明治六年五月九日

研究資料

京都府

右町戸長

註一 各頁の首尾を記號「」を以て示すこととする。

註二 新三本南町とあるは新三本木南町の誤記。此の居は即ち、頼山陽の舊居、水西莊山紫水明處である。是より先、明治五年、夫人春子と婚を結んだ鐵齋は、聖護院村の住居より御幸町に移つたが、其の居餘りに狭小なるに依り、更に轉じて當時空屋となつてゐた山紫水明處に移つたのであると傳へられる。其の轉居の日時は、なほ詳にし得ぬが、此の記事に依つて、其れは明治六年五月以前なることを推定し得る。なほ、大正十五年村上素道出版の連月尼全集中卷所載、第二百廿二番、十月十五日付、鐵齋宛書翰に「三本木へ御てん宅のよし、東山もみえ川ばたの行人もみえ候て、はれやかにてよろしき御すまひのよし」とあり、或ひは此の書翰の年次は明治五年かと思はれる。もし此の想像にして正しければ、三本木轉宅は明治五年十月前後に屬する事となる。因に云ふ、大正十年八十六歳の時、鐵齋は山紫水明處の圖を描いてゐるが、是は菅井梅關の古圖に依りしものであつた。同圖は大正十四年發行の鐵齋墨妙集に掲載されてゐる。なほ從來の傳記、鐵齋と春子夫人との結婚年次を明治四年とせるは非。鐵齋卅七歳、夫人（弘化四年生）廿六歳の時なるを以て明治五年に當る。

註三 鐵齋の名、及び號に關しては相當困難なる問題がある。始の名は猷輔と傳へられ、此の名は元治二年八月出版の「稱呼私辨」に用ひられてゐるが、なほ明治初年まで使用せられたる形蹟がある。即ち明治三年、鐵齋の編輯せる太田垣連月尼の歌集「連月庵集」の稿本が、現在富岡家に保存せられてゐるが、其の表紙に富岡猷輔輯と記してあるのである。しかし慶應年間出版の「孫吳約說」には道節と記載ある由、此の書未見に付正確な事は云へぬが、慶應三年十一月出版「宣興楚壺譜」の奥書には鐵齋居士富岡節とあれば、此の當時は道節を名としてゐたのであらう。作品に就いて見るに、萬延元年の作に裕軒昂と記せるものあり。大正二年出版の鐵齋畫牘所載壽老圖が即ち是である。此の畫牘は大正元年、鐵齋の喜壽を祝して南越中村氏が其の蒐藏する鐵齋作品を印刷に附せるもの、鐵齋の友人内藤湖南博士の題言もあり、相當信頼を置くに足るものであらうが、此處に裕軒昂とあるは裕軒は號、昂は名であらう。此の號と名は他に所見なく、なほ今後の研究を要する。慶應年間の作品には大旨鐵齋の號を用ひ、道節、節と署名してゐるが、百鍊の名は維新以後の作に多く見るも、其の以前にも是

を使用した事實はある。即ち上に述べし稱呼私辨は見返に富岡猷輔著とあるも、本文冒頭に富岡百鍊識とあり、文中、百鍊按、百鍊曰等と記してある所を見るに當時或ひは百鍊を號として用ひしものか。今此處には元鐵齋事富岡百鍊とあり。鐵齋の號を名の如くに記してあるが、或ひは左様なこともあつたのであらうか。なほ今後の研究に俟つ。

御請書

上京廿二區新三本木南町

元鐵齋事
富岡百鍊

右之者御用之義有之候處當時他出致候ニ付
歸京次第届出可申旨被 仰付奉畏候依
之此段御請申上候

上京廿二區新三本木南町

戸長 西村四郎兵衛〇

明治六年五月十日

京都府知事

長谷信篤殿

右之事件ハ五月二日出立從東京奥州へ
下向之處京都宅ヨリ郵便ヲ以東京之
寓居へ申來且都合モ有之廿二日出立六
月六日歸京々々之義戸長へ届翌日京都府江
歸京之趣相届ケ

註一 鐵齋の手録に別に「拜命誌」なるものあり。「官記」と全然同一の美濃紙算紙十
三枚を綴合せたるもの。其の内容、此處に紹介する「公私事歴録」と大同小異なるも、
明治十年一月を以て擱筆してある。右の「拜命誌」の記事に依れば、此の時鐵齋は東
京より木曾街道を経て歸洛したのである。此の旅の記録類は、現在調査せる限に於

ては富岡家に殘存せず、從つて此の記事は重要な資料である。

同月廿二日明日出府可致之旨戸長へ
御達しニ付廿三日出府之處御渡し書

上京第廿二區新三本木南町

富岡百鍊

教部省江出仕申付候事

明治六年六月

京都府

右御渡し相次而諸達之間ニ於テ屬
出席教部省之辭令書御渡しニ成
右

富岡百鍊

任湊川神社權禰宜兼補訓導

教部大承從五位三島通庸奉

明治六年六月十五日

註一 辛未とあるは癸酉の誤記。なほ此處に教部省の角印を摸し有れど省略。以下辭令
書等、夫々の省印等あれど略す。一一註せず。

右全文ヲ寫

右從教部省遙任欽而御請申入候

明治六年六月廿三日

富岡百鍊

京都府知事

長谷信篤殿

「右二通ヲ差出ス

同月廿九日支度調ニ付

本月廿三日從教部省湊川神社權禰宜

被 仰付ニ支度相調今日出發赴任仕候段

御届申置也

六月廿九日

京都府知事

長谷信篤殿

七月四日迄不快ニ付大阪ニ滞在同四日其地方

官兵庫縣へ届ケ書出ス

六月廿三日於京都府廳湊川

神社權禰宜拜命仕候處支度相調

「大阪へ相出候節不快ニ付今日赴任

致候段御届申入也

七月四日

湊川神社權禰宜

富岡百鍊

兵庫縣令

神田孝平殿

元來湊川神社之宮司ニ神田孝平(註一)

吹舉之處如何間違ニ哉左之通ニ付

神田氏ニ面會辭退可仕之示談ニ及候處

神田氏茂是ハ案外下等之事ニ付早々

御辭退可有之遺憾之事と咄し

「因而即日辭表ヲ出ス

六月廿三日於京都府湊川神社權禰

研究資料

宜拜命今日赴任ニ及候處不快追々

重ク相成候間乍自由之事全快之

程何日と難斗候間免官之義御聞

濟被爲在此段願上候

明治六年七月四日

教部大輔穴戸璣殿

(註二)

註一 神田孝平は蘭學者、兵庫縣令として名聲あり。後、元老院議員に任ず。男爵を賜

はる。英學者、神田乃武は其の養嗣子。鐵齋と孝平との關係は、此の記事以外なほ詳

にしない。

註二 穴戸とあるは穴戸の誤記。

此節湊川未宮司不極之處俄ニ折田年平

宮司ニ郡山無隱權宮司ニ任ス如此ニ付間違

生し候趣キ他日東京ニ而教部省少輔

黒田清綱子咄し是ハチト不審之次第

「四月之事故未極之前月ニ付神田氏吹

學之義也右折田氏ハ世間評判モ有

由

註一 鐵齋は明治七年六月、北海道遊歴に發し、其の途次東京に立寄り、黒田清綱と兩

三度面會してゐる。其の事實は其の旅行記「北遊日記」に誌されてあるが、此處に他

日とあるは、即ち此の時を指すのであらう。清綱は薩摩の人。明治の重臣。子爵。洋

畫家、黒田清輝は其の養嗣子。鐵齋と清綱との關係は、右旅行記事、並びに此處に記

す所の外なほ詳にしない。

○

八月一日湊川ヨリ免官書到來

湊川神社權禰宜兼補訓導

三三

富岡百鍊

依願免本官并兼職

明治六年七月廿五日

教部省

。右之趣京都府へ届ケ出ス

然ル處一般路費等可受之筈百鍊ハ打

捨即刻歸京之事ニ付十月十三日湊川神社

「ヨリ

一金三圓貳十五錢 (註一) 路費ハ渡ラズ可疑

右六月七月半月分宛之給料

送り來ル是モ不審月棒之規則ニ

不恰然中間寺尾忍と申者取斗

之事ニ付何共「難斗」疑敷心得也

先請取書出ス(註二)

註一 「路費云云」以下、此の一行朱書。

註二 從來の諸傳記、大旨、此の湊川神社權禰宜任免の事實を、明治八年の事と記せるは非。蓮月尼の歿せる年とするものもあるが、蓮月は明治八年十二月十日を以て死去したのであるから、これも誤謬である。明治六年の此の事件、鐵齋時に年卅八。

明治七年甲戌一月京都府御用召ニ付

出府之處

上京廿二區東三本町

平民富岡百鍊

皇國地誌御編集ニ付關涉之書籍御

「採集之旨ヲ奉載シ先般所藏之書籍若干

獻納奇特之事ニ候依而爲其賞別紙

(ママ) 目之通下賜候條此旨相達候事

明治七年一月

三四

京都府知事長谷信篤代理

七等出仕國重正文

右書籍之目錄若干アリ御賞金百鍊ニ及書林

佐々木惣四郎持合之本ニ付金拾五圓宛也 (註一)

註一 明治五年の太政官日誌七十六號に九月二十五日付を以て「今般於正院皇國地誌編集相成候ニ付、右關涉ノ書籍並地圖類、遍ク採集致シ候間、諸省各府縣ニ於テ、只今迄備置候分ハ勿論、其管下私著ノ分ヲモ、早々取調、書目可差出候、此旨相達候事」とあり。鐵齋は此の命に應じて書籍を獻納したのであらうが、其の年次は「拜命誌」に「明治癸酉三月日本國々之地誌并地圖獻納」とあるを以て、明治六年三月なりしことを明にし得る。しかるに此の地誌編集の事に當つた正院の所屬する太政官は、明治六年五月五日、皇居炎上の際に類焼し、其の文書大半焼失した事實があり、鐵齋獻納の書籍類或ひは此の時祝融の難に遭つたかと思はれる。幸にして此の難を免れしとするも、もし傳ふるが如く内務省内に保存されしとすれば、明治八年七月三日、内務省火災の節焼失したものであらう。なほ明治六年の太政官日誌第百六十三號は十二月廿三日付を以て、太政官より京都府への達書を載せてゐる。即ち左の如し。「其府管下平民富岡百鍊、商佐々木惣四郎所藏之書籍、獻納候段、奇特ノ事ニ候、依テ爲其賞、別紙目錄之通下賜候條、此旨可相達事。」

上京第卅區龜屋町

富岡百鍊

右之者達シ之義有之明卅日午前九時

出廳可致也。 (註一) 此時御幸町御池上ル所ニ住

「明治九年五月廿九日

京都府

同町戸長

卅日午前九時出廳之左之書御渡し
任石上神社少宮司

教部權大丞正六位鈴木魯奉

明治九年五月三日

因而御請書上ル

右全文ヲ寫

謹而御請申上候

京都府權知事

植村正直殿

因而右之趣石上神社へ通知ス

註一 龜屋町は通稱、御幸町御池上ル。新三本木南町の山紫水明處より、此處に移轉したのであらうが、その年次は未だ詳にし得ぬ。明治九年五月以前なるは此の記事に依つて確め得るが、七年十月には未だ山紫水明處に在りしこと、先に黒田清綱との交渉に就て觸れし「北遊日記」に十月六日歸宅の旨を記し、其の奥書に「記于鴨川之山紫水明處頼氏舊寓」とあるを以て確實である。故に此の轉居は、七年十月と九年五月との間に行はれしものと推測される。なほ今後調査を進むれば明瞭とならう。鐵齋は明治十五年三月、上京區藥屋町に居を定むるまで此處龜屋町に籍を置いてゐたのである。

註二 欄外空白に「石上神社ハ大和山邊郡布留村祭神ハ誦ノ靈神と稱御神劍也」と朱書、また「丙子」と墨書す。丙子は即ち明治九年。

註三 植村とあるは横村の誤記。

「本月卅日於京都府廳其御神社之

少宮司拜命仕候處所勞中ニ付四五日之間ニ赴任可仕此段御通知ニ及候也

明治九年五月卅日

研究資料

石上神社少宮司

富岡百鍊

石上神社

社務所御中

右住居町内戸長へモ達し置

右ニ付六月四日出立ニ付京都府へ其段

届ケ書出ス

「右出立奈良へ着不快ニ付滞在尤石上神社

大宮司ハ嘗政友ト云九日着不快ニ付奈良へ

歸リ養生但堺縣管轄ニ付着社届ケ

出ス漸ク廿日ニ出仕ス

廿一日拜賀式ヲ行神饌七臺ヲ奉ル

禰宜周旋致ス祝詞ヲ奉ル跡直會一社

着席祝賀ヲ行

註一 從來凡ての傳記、此の石上神社少宮司任命の事實を湊川神社より歸つて間もなくの事としてゐるのは、湊川神社の件を明治八年の事とする誤謬に基づく謬説。湊川神社の件は明治六年、此の件は九年であるから、其の間三年の時日を経みしてゐる。

註二 奈良縣は明治九年四月十八日以降、一時堺縣に合併されてゐた。

十一月廿九日辭表ヲ相認堺縣へ差出之處

縣令稅所氏説諭ニ付罷ム此節神

官教導職無漏布達アリ右神道四部

長トテ大教正元締アリ仍而右四部大教正

ニ隨意所屬スベキノ規則是ハ若教導

「職不奉ハ免官等此事終身可奉之

三五

義ニ付元來何共不審之事因而免官
相願之心得不得止之説諭モ有仍而前日
稻葉正邦殿所屬書出ス然ルニ所屬
引請之辭令書到來右免官之

願書差出之心得之折柄ニ付辭令書
神道事務局へ返上ス此事件之
布達等ハ教部省御布達ヲ可讀^(註二)

不然ハ不詳知也尤所屬不奉之義ニ付
堺縣參事吉田豐文へ縣合書出ス
返書不來其儘在勤ス此際神社

之廻廊頽敗ニ付伺書ヲ出ス右ハ

「御國事多端之時ニ付屢煩レ官ハ百鍊
奮勉不足ニ如此因獻私費修補可
致之願書也堺縣へ廻ス

又御幌^{白紋綾八巾}紐長サハ丈壹領又
裏羽二重
新鏡徑八寸石上神社鑄付

右神社祭式ノ制ニ順シ製○奉納受書アリ

是ハ百鍊百鍊徒ニ月棒ヲ受尋常^(註一)

官人之如キヲ不欲少シクニテモ欲報

國家之微意故ニ如此但欲報國家

之微意獨是而已ニ非ス從來皆此意

而已然レ共不抄又時ト不合之事多シ

註一 堺縣令稅所爲。薩摩の人。大阪、河内、兵庫、堺、奈良各府縣に歴任知事たり。
後、元老院議員、宮中顧問官、樞密顧問官に任ず。子爵を賜る。鐵齋は此の人の知遇
を受けること極めて厚かつたと云ふ。

註二 教導職とは明治の初年、一般國民を教導する爲に設けたる職名。多く神官僧侶を

是に補した。三條の教憲とて、明治五年四月廿三日、太政官より教部省に下せるもの、
即ち敬神愛國の旨を體すべき事、天理人道を明かにすべき事、皇上を奉戴し朝旨を遵
守せしむべき事の三箇條の主旨を反覆敷演して親しく説教訓誨するところ有らしめた。
同年同月廿五日官制公布、同年八月八日神官は都て教導職に兼補さるべき旨の公布あ
り。同九年一月十二日、教部省布達第一號に依り神道部分を分つて三となし神道教導
職は銘々希望の部に屬することとなり、同年十月二十三日、同省布達第七號に依つて
更に一部を加へ四部となした。此處に鐵齋が特に不審とせる達書類は次の如きものか
と思はれる。

明治九年九月十八日教部省達書乙第十二號

「教導職試補申付方之義ハ、自今精細其人品ヲ鑒識シ、終身教義ニ從事スベキ趣、其
師及親戚(親戚ナキ者ハ故舊)連書ノ保證書爲差出、右寫相添、七年當省乙第三十七
號達書ニ照準シ、地方廳へ協議之上、試補可申付、此旨相達候事。」

同年十二月二十日同省番外布達

「本年三月三十日當省番外達之趣モ候處、現今神官ニシテ教導職補任不相成向モ有之
不都合候條、早々望之部部派管長へ所屬申通教導職補任之手續可取計、此旨相達候事。
但本文之趣不承諾之者ハ、本官可差免答ニ候條、取調可申出事。」

(以上、法令全書より引用。)

「明治十年一月三日堺縣ヨリ教部省ノ袋入
之辭令書到來^(註一)

石上神社少宮司

富岡百鍊

任大鳥神社大宮司

(以下準之)
大政大臣從一位三條實美宣

大史正五位土方久元奉

明治九年十二月廿七日

右全文ヲ寫シ

謹而御請申上候也

大鳥神社大宮司

富岡百鍊

明治十年一月三日

式部寮

御中

右堺縣庶務課中社寺掛指令ニ付認メ方

如此因請書ハ右社寺掛へ向出ス

右之趣大鳥神社江大鳥神社ハ堺縣下和泉國大鳥郡大鳥村祭神日本武尊

向一書ヲ出ス

今三日其御社之大宮司拜命仕候處前

任之事務取調候間暫ク赴任延引致候間

其段御答ニ及候也右右上神社ハ菅政友モ

舊年十二月卅日免官然ル處今尙滞在中

「大鳥神社之大宮司馬來伸子石上神

社之大宮司ニ赴任ニ付右引渡事件ハ菅

政友ヨリ直ニ馬來氏へ如法引渡百鍊ハ

不關之分トナル但外雜用有之十三日

同社御暇之神饌ヲ奉ル七臺十四日ハ

一社同僚ヨリ送別之酒宴アル十五日出

發十六日堺へ着申教院會日少宮司

池田昇出會之事ニ付出席ス

十七日大鳥神社へ赴任堺縣へ赴任

届ケ出ス猶亦京都府へ届ケ

轉任御届書

研究資料

本月三日於和州石上神社堺縣下泉州

「大鳥神社之大宮司拜命今十七日赴任

仕候段御届ケ申入候

明治十年一月十七日

大鳥神社

大宮司 富岡百鍊〇

京都府

權知事植村正直殿

又一書

右別紙之通泉州大鳥郡大鳥村大鳥神

社へ轉任仕且原籍戸長へモ右之段通知

ニ及置候也

上京卅區御幸町御池上ル龜屋町

富岡百鍊〇

京都府

權知事植村正直殿

右二通京都府庶務課へ向差出ス又

右之趣元籍戸長へ通知ニ及申(註二)

註一 此の辭令書は見返に記されたる如く、掛幅となし富岡家に保存せられてゐる。敬

神家鐵齋が如何に此の任命に感奮興起せるか、其の狀を推察し得て餘りある。此の任

命は稅所篤の推輓に依るところ大なりと傳へられてゐる。なほ從來の諸傳記、此の件

を明治九年四十二歳の時と記せるは四十一歳の誤り。

註二 「拜命誌」の記事は此處までを以て終つてゐる。

〇

今明治十年一月和州畝火山東北御陵(註一)

御巡幸ニ付堺縣令ヨリ内命右 御幸

三七

道筋近傍之神社又官幣大社右縣下

所在之御歴聖御陵位置之繪圖卷

認一月廿五日庶務課中社寺掛江出ス

右巻尾ニ付

大鳥神社大宮司富岡百鍊寫之

「跋文ヲ附是ハ 天覽ニ入リシ由感佩但

堺縣廳ヨリ河内道明寺龜瀬越右折

高田今井畝傍山ヨリ北南都

山城國境迄也九年十二月十八日社寺掛

一名と同行實地檢分十年一月

廿五日落成縣令稅所氏ニ呈ス右圖モ

右路費ヲ他日賜フ也

註一 次頁七行目「右路費ヲ他日賜フ也」まで朱書。

註二 大正六年九月、大阪美術俱樂部に於て催されし稅所子爵家賣立に、此の圖卷并びに行幸御飾付畫卷が出品せられたが、現在其等は何人の所有に歸してゐるか、なほ詳にせぬ。

○

明治十年二月十四日午前九時拜

天顏於堺縣行在所

執奏侍從

東久世通禧卿

明治十年七月廿五日堺縣ヨリ左之書來ル

御用之義有之候間明廿六日午前第八時

「正服着用御出頭可有之候也

明治十年七月廿五日

大鳥神社

太宮司富岡百鍊殿

堺縣□

廿六日午前八時縣廳ニ出頭之處縣令公
左之宣下書ヲ御渡し
(註一)

富岡百鍊

叙正七位

右大臣從一位岩倉具視宣

大書記官從五位日下部東作奉

明治十年七月十七日

左之御請書ヲ出ス

被叙正七位之旨謹而御請奉申上候

大鳥神社大宮司正七位富岡百鍊○

明治十年七月廿六日

式部頭從三位坊城俊政殿

又

今般被叙正七位難有御請仕候

謹而御禮奉申上候也

大鳥神社大宮司

正七位富岡百鍊○

明治十年七月廿六日

宮内卿德大寺實則殿

(註二) 右二通ヲ式部頭殿宛ニ書縣廳へ

(註三) 差出ス△宮内卿分郵便所へ出ス事

註一 此の宣下書は見返に記されたる如く、掛幅となし富岡家に保存せられてゐる。なほ從來の傳記、此の敘位の件を大鳥神社宮司辭任の年、即ち明治十四年と記せるは非。

註二 欄外に「大鳥神社へ獻納」と朱書。
註三 「宮内卿云云」以下、次頁五行目「金壹圓獻納」まで朱書。

○

七月卅一日當神社私祭堺宿院御旅所江
渡御ニ付騎馬供奉但祭服着用ス

○當私祭前當社本殿紫幕無之因長

四間半巾五幅但五反也地ハ絹ニテ菊

之紋貳個附ル并ニ絞リ紐附

○鐵角燈籠壹對

右二品獻納

○和州石上神社江廻廊修營料

金五圓獻納請書來ル

○又當社之拜殿前敷石獻納次ニ

「可記」

○當社へ本朝神社考○熱田神社縁起

奉納 堺鑑泉州志奉納

○大和高市郡飛鳥村飛鳥神社大敗ニ付

金壹圓獻納

京都府へ叙位之旨届ケ書并

原籍町戸長江茂同段之事

八月廿日出ス

註一 當時大鳥神社は式微其の極に達してゐたので、鐵齋は其の復興に全精力を傾注した。以下記事に其の狀を察し得る。當時鐵齋の月給僅かに廿五圓、その中十圓を割いて京都の母に送つてゐたと傳へられ、是等獻納金其他は一に鐵齋の畫料に依るものであると云ふ。しかも當時なほ其の畫料極めて低く、爲に鐵齋の努力奮闘は尋常ならざるものがあつた。

研究資料

註二 欄外に「明治十年七月神宮祭主久通宮三品朝彦親王當社江御參拜帑袋ヲ賜フ」と朱書。鐵齋は前後を通じて、久通宮家の御眷顧を蒙ること極めて厚かつた。

○

明治十年十二月七日出十二日着

神官一般被廢旨御達シ到來但長官

後官赴任事務讓渡迄滞在之事

十四日縣廳并内務省江

「御請書滞在之旨縣廳へ持參ス

後官薦舉伺書ヲ縣令公へ

奉ル

同十八日從堺縣御辭令到來

正七位 富岡 百鍊

任大鳥神社宮司

大政大臣從一位勳一等三條實美宣

大書記官從五位中村弘毅奉

明治十年十二月十二日

「右ニ付堺縣令へ今般辭退可致内談令不肯

同十九日御請書ヲ奉ル

全文ヲ寫シ

右謹而奉御請申上候

大政官大書記宛 名印

右二通ヲ出シ今一書ヲ副江

堺縣令宛別紙御進達

合三通ヲ奉ル

三九

尙亦京都府戸籍掛江報知ス又舊町内

戸長ヘモ通知致候

神官ノ長官轉任或ハ新任之節授受ノ式アリ

「今般ハ直ニ當社ヘ如レ舊長官ニ付別ニ授受ノ人モ無シ

因テ其旨ヲ内務省宛ニテ縣ヘ出ス

此般廢官トナリ滞在人給料伺ニ出シ處

滞在人屆ケ無之者ハ給料在勤中ト

同シト是ハ布達ニ不見ト雖縣廳ニテ承ル

但後官定レハ解任之事ヲ可屆之事

如常式

(略)(註四)

註一 教部省は明治十年一月十三日を以て廢止せられ、其の事務は内務省に移管され
た。

註二 次行「奉ル」まで朱書。

註三 税所篤。

註四 次の一頁は明治十一年一月一日、内務省ヘ奉呈せる元旦奉祝詞の體裁を圖入にて
説明す。此處には割愛する。故に、次に「二日縣令公云々」とある記事は、明治十
一年一月二日である。以下、之に準ず。

○

〔註一〕
「二日縣令公并ニ堺ヘ年始ノ賀ニ廻ル

一月五日河内讚良郡南野字鴈屋村小楠公墓

修營落成之祭式執行ニ付四日出發南野村泊

午前九時始ル祭主縣令神靈遷百鍊」太盛

墓石高二丈七尺別ニ記ス

明治十一年五月十四日河内郡

上水分村水分神社ノ境内楠公之祠

五百五十年ノ祭祀アリ且此近邊

字山ノ井是ハ楠公誕生地ノ舊蹟老樹ノ
紫微アリ古井戸今亡

此地高六尺巾三尺ノ碑ヲ建且文字

楠公誕生地ト書百鍊ノ筆因テ

參拜ス水分神社ハ楠公産土神

也

「明治十一年五月當社ノ攝社四柱神ノ

御靈代ノ神鏡四面新鑄奉納ス

井瀬神社(註二) 爾波比神社 穴戸媛命

兩道入媛命以上

又本殿江錢燈籠新鑄獻納

大和高市郡カキ柏ノ森村御鎮座

加夜奈留美命神社

右額敗之上意外小祠ニ付書付ヲ

認其由緒ヲ述シ縣江出ス并ニ金

五圓ヲ奉納村人區長社ヲ新築ノ

舉ト成(註三)

(註四) 金若干并御靈代ノ神鏡并ニ唐櫃ヲ奉納

(註五) 右大鳥神社ヘ當明治十一年中

奉納金額現計四十五圓也品物者

此外ニ出ル

古鏝 二領奉納神事用

明治十二年三月廿五日當社ヘ奉納金

貳拾圓右手水舍料寄獻

九月廿八日

金百圓也

右鳥居新建料ニ寄附ス

但鳥居ハ本年九月卅日落成ス惣計

本年百廿圓也奉納

一鳥居十月落成

註一 欄外に「但四日縣廳年賀也」と墨書。

註二 爾波比神社とあるは美波比神社の誤りならん。

註三 加夜奈留美命神社復興の舉は、既に從來の諸傳記に記されてゐるが、此處に始めて其の年次を明にし得る。

註四 此の一行朱書。

註五 欄外に「四十五圓」と朱書、次に「諸國之神社江以便宜奉納金畧此」と墨書、次に「貳拾圓」「百圓」と朱書しあり。

○

「十月二日教導職(註一)一般神官兼務之制タリ百鍊今日迄辭退セリ故今有此命也

大鳥神社宮司 富岡百鍊

兼補權少教正

明治十二年九月廿日

大政官

右縣廳より相廻ル御請書ハ

大政官書記宛ニテ認メ

内務省へ出ス尤縣廳へ

廻ス事左ニ載ス

十月三日

「被兼補權少教正之旨謹而

御請奉申上候

研究資料

明治十二年十月三日

大鳥神社宮司

富岡百鍊^④

大政官

書記官御中

右三枚認縣廳へ出ス

原籍町戸長へモ通知之事

註一 「教導職云云」以下、「今有此命也」まで朱書。

○

「大和高市郡雷村方今廢社々地壹坪ヲ存(註一)

氣吹雷響雷吉野大國栖御魂神社二座

右再建ヲ欲シ明治十二年八月金

貳拾五圓ヲ社寺掛江廻シ其區長江

照會村方迄差出シ建築之舉ヲ

謀ル區長諾ス(註二)

明治十二年十一月奉納大鳥神社

上古鐫刻石品十六顆但其形似如勾玉之品種々天造寄品

當社方今無神寶故以之充神寶

也原價凡三拾圓

和歌石碑建築費

金四拾圓奉納(註三)

「明治十三年

繪馬舍建築費

金拾五圓奉納

明治十三年九月十七日

明治十四年辛巳一月

四一

御内陣ノ御樋代御濱床等

新造奉納ス

(註四)
一金百圓也

(註五)
明治十四年二月七日堺縣被廢合併
(マ)

大坂府江之事

註一 欄外に「延喜式内大社當時其社蹟芝生ヲ聊存ス廢社ノ年月未祥」と朱書。

註二 此の神社は延喜式神名帳に其の名が見えてゐる。此の再建の舉は從來の傳記には記されてゐない。

註三 欄外に「奉獻百圓也」と墨書。

註四 此の一行朱書。

註五 此の二行朱書。

○

「明治十四年六月奉納金三拾圓并書面添

當社裝飾御幕汚穢見苦敷新調無之ニテハ

不都合仍而紫縮面五巾御紋幕料之内江

金三拾圓也

右奉納致度尤不足分ハ社費金等ヲ

相集新調ニ相成度此段諸課御一統ヘ

申進候事

明治十四年六月

大鳥神社々務御中

明治十四年十一月

金貳拾圓 燈油料

右永代料奉納致候也

宮司 富岡 百鍊

「明治十四年六月辭令書

權少教正 富岡 百鍊

大阪府下和泉國

大鳥神道分局長

申付候事

明治十四年六月

總 裁

右東京神道事務局より來

當時總裁ハ有栖川一品幟仁親王

副總裁從四位岩下方平

「明治十四年十一月七日辭表ヲ呈

原籍京都府下ニ罷在實兄病死致

老母病氣之折柄侍養人無之痛心之

極速ニ歸養介抱等孝養相遂度乍

自由免官之義御聞濟被爲在度

謹奉懇願候也

大鳥神社

宮司 富岡 百鍊

明治十四年十一月十日

大政官

大書記官御中

右二通

別紙辭表呈進仕度御執奏之義

「宜敷奉願候也

明治十四年十一月

富岡 百鍊

内務卿山田顯義殿

二通

外ニ彌宜ヨリ添書内務卿へ一通

大坂府知事へ一通合六通

社務所ヨリ府廳へ郵寄

同十二月十九日大坂府廳ニ出仕

大島神社宮司 富岡百鍊

依願免本官專補權少教正

明治十四年十二月九日

大政官

右全文ヲ寫

内閣書記官御中

本副二通ヲ差出ス

權少教正 富岡百鍊

依願大阪府下和泉國大島郡神道事務分

局長相相解候事

明治十四年十二月廿八日

神道事務局

「明治十五年一月廿三日

大阪府社寺掛立會後任池田昇江

社務悉皆引渡證書二通受取

相濟

○廿八日京都府廳并ニ戸長へ歸京

研究資料

屈差出ス (註一)

(略) (註二)

註一 從來の諸傳記、大島神社宮司の任を辭して歸洛せる日時を、明治十四年春と記せるは非。辭表提出は十四年十一月七日、十二月九日付免官辭令を入手せしは同年十二月十九日、京都市上京區藥屋町の小川爲美と家屋賣買契約を取換せるは同年同月廿五日、京都府へ歸京届を提出せるは即ち翌十五年一月廿八日、此の藥屋町住居に移りしは同年三月五日である。なほ此の藥屋町に移るまで、鐵齋は一時栗田口に寓居してゐたと傳へられるが、原籍は當時なほ龜屋町にあり、藥屋町移居と共に其の籍も同處に移されたのである。

註二 以下、此の頁に於て七行、並びに次の三頁を省略する。即ち此の頁に於て六行は、二月八日、内務省社寺局へ履歷書提出の旨を記し、此の頁最後の一行と次頁四行は、二月十一日紀元節參賀の爲、京都府廳へ出頭すべき旨の告達、次の七行は明治十七年一月一日、京都御所へ參内すべき旨の區長達書を寫してある。なほ此の達書の日附は、明治十七年十二月廿九日となつてゐるが、十六年の誤記であらう。次の一頁は、當日參殿の順路を圖入にて説明。更に次の一頁は、明治十七年紀元節に宮内省支廳へ參賀出頭すべき旨の告達來りし旨を記し、八月十一日神佛教導職一般被廢の旨、同十七日教導職再置の旨を記してある。由來、教導職は終身職につき、是等告達の類は神官辭任後もなほ鐵齋に送附せられたのである。因に云ふ、教導職は明治十七年八月、太政官布達第十九號を以て廢止、爾後これを神佛各教派管長に委任したのである。

正七位 富岡百鍊

帝室技藝員ヲ命ス

大正六年六月十一日

宮内省

於大佛博物館

股野琢被達時年八十一 (註一)

四三

(註一)
大正八年九月八日

正七位 富岡百鍊

内 閣

右前同於博物館

(略)(註三)

註一 大佛博物館とは當時の京都帝室博物館、現在の恩賜京都博物館。その敷地、方廣寺大佛殿の跡なるを以て、斯く記せるものであらう。股野琢は當時の帝室博物館總長。年八十一とあるは、股野の年齢を指すものとすれば誤謬である。同氏は大正十年八十四歳を以て歿したのであるから、當時八十歳である。鐵齋は此の時、即ち大正六年には八十二歳。

註二 帝國美術院會員を仰付けらるるの旨を書落したのである。大正八年九月五日、帝國美術院規定始めて制定せられ、同月八日、鐵齋時に年八十四歳にして最初の同院會員を仰付けられたのである。

註三 以上を以て公私事歴録は終つてゐるが、三丁六頁の空白を置きて、明治十九年十一月三日、烏丸中長者町の護王神社落成正遷宮に就き、矢野玄道の書、「能許曾神習」横額を奉納し、有志の寄附金を周旋せる旨の記事あり。護王神社は和氣清麿を祭れるもの、藥屋町の鐵齋自宅より極めて近距離にある。更に一頁の空白を置き、明治十八年、京都府廳へ提出せる元旦奉祝詞の寫あり。其の次の頁、即ち本書最終頁には、明治元年神祇館建築の舉より、同十年教部省廢止、内務省に社寺局を置くに到るまでの官制變革を記録し、更に明治廿一年二月二日、車折神社祠掌村方より届出、四日允可となる旨を誌してある。車折神社は京都府葛野郡嵯峨村に在り、祭神は右大臣清原賴業。此の社廢滅を惜んで、鐵齋は獨力これを復興したと云ふ。此の件は從來の諸傳記にも記されてあるが、今此處に其の年次を詳にし得る。以上を以て官記の記事は終る。

寫官帛體裁

京都府平民 天保七年十二月十九日

富岡百鍊

明治九年五月三日任石上神社少宮司

同年十二月廿七日任大鳥神社大宮司

同年七月十七日叙正七位

同年十二月神官改正任大鳥神社宮司

同十四年六月九日 大阪府下和泉國神道 分局長申付候事 總裁

同年十二月九依願免本官專補權少致正 (ママ)

同年同月廿八日依願大阪府下和泉國神道分局長相解任事

同廿八年十月九日日本全國大博覽會審査員囑托 (註一)

大正六年六月十一日帝室技藝員ヲ命ズ 宮内省

同八年帝國美術院會員被仰付 内閣

右二通美術院へ差出ス

(註二)
大正十一年二月廿六日

註一 鐵齋は明治廿八年四月、京都に於て開催されし第四回内國勸業博覽會第二部審査官に任命、書と篆刻を審査した。しかし出品は、してゐない。彼は京都新古美術展覽會等には時に鑑査員たりしこと有りしも、かかる大博覽會に關係せしは前後唯此の一回のみ。また作品も日本南畫協會展覽會には、間々出品せしこと有るも、其の他の會には殆ど關係せず、帝國美術院會員としても、其の展覽會には何ら關係が無かつた。なほ、此處に日附を明治廿八年十月九日と記せるは誤記なるべし。

註二 此處に美術院とあるは、即ち帝國美術院。鐵齋は此の履歷書提出の年、即ち大正十一年七月廿一日、正五位に敘せられた。時に年八十七、恐らく此の履歷書は、右敘位の目的を以て、其の提出方を命ぜられたのであらう。因に記す、大正十三年十二月卅一日、八十九の高齡を以て歿するや、特旨を以て位一級を追陞し、從四位に敘せられたのである。